

# しいむじな

発行

千葉県立中央博物館  
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先

〒260-8682  
千葉市中央区青葉町955-2  
TEL:043-265-3111

http://www.chiba-muse.or.jp/  
NATURAL/special/yama/

2020(令和2)年6月発行

2020・夏

69

特集

## ちょうぼう 人見神社からの眺望



写真② 国土地理院の三角点の標石と眺望地点



写真① 「ちば眺望100景」の解説板と東京湾岸の景観

「ちば眺望100景」は、一般公募や市町村の推薦を基に、千葉県が平成18年に県内の優れた眺望地点94ヶ所を選定したものです。

人見神社は、小糸川の下流右岸に広がる小高い台地の西端にあります(次頁図①)。境内の北側の崖上からは、北西向きの景観が開け、「ちば眺望100景」のひとつになっています。ここからは、埋立地の工場群や、小糸川を渡る内房線、さらに富津岬を前景に、東京湾をはさんで三浦半島が見えます(写真①)。

一方神社の南西側には、国土地理院の三角点(標高六七・三メートル)が置かれ、そこから南東方向が広く見渡せます(写真②)。ここは以前はマテバシイなどに覆われて、見晴らしが良くなかったようですが、地元の方々が伐採を行い、眺望が利くようになったということです。

手前にはゆったりと曲流する小糸川と、君津市街や水田が広がる低地、中景は平坦な三舟山と河岸段丘、遠景には鹿野山のいくつかのピークや、房総丘陵の山々が認められます。ここは君津地域の地形を眺めるには、絶好のポイントです。(八木令子)

### 房総の山のフィールド・ミュージアムとは

房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業の一環です。観察会を開催したり、旧君津市立三島小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点として、地域の方々のご協力をいただきながら、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

### おしらせ

今年の3月末をもって君津市立三島小学校は秋元小学校と統合して清和小学校となり、旧清和中学校の校舎に移転しました。17年間もお世話になった三島小の関係者のみなさまに深く感謝申し上げます。三島小教室博物館は、君津市教育委員会のご協力をいただき、同じ場所で存続できることとなりました。ただし、従来は毎週金曜日に開館しておりましたが、今年度からは毎月第2、第4金曜日の隔週開館となります。開館日にご注意ください。

なお、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当面、三島小教室博物館は臨時休館しております。また、「山の学校」等の行事も中止しております。再開の時期については千葉県立中央博物館のウェブサイト等でお知らせします。ご不便をおかけしますがご了承ください。(尾崎煙雄 2020年6月9日記)



写真 教室博物館のある旧三島小校舎

連載

### 小櫃川流域の生きもの ゲンジボタル ～せせらぎに光の舞い～

初夏のたそがれどき、「蒸し蒸ししますね」、「水が田にほとんどありません。ホタルがこの谷津に本当にいるのですか?」、「この奥の田に、たくさんいるはずだわ」と案内役の女性。「子供の頃、たんぼでホタルをとって、蚊帳の中に放して、楽しんだ」などと自然好きの方々としゃべりながら、広い谷津田の山際の農道を歩き始めた。20～30分ほど歩くと、谷津のどん詰まりに着いた。そこは竹藪で台地と遮られ、田に稲が育ち、用水のせせらぎが聞こえる。空はうっすらと明るいが、台地の斜面や農道は真っ暗になった。すると農道の草むらから緑色を帯びた光がピカ、ピカと点滅した。そして、台地の斜面のあちこちで光がすーと糸のように流れた。しっとりとした、ファンタスティックな光景であった。光の数は約40。「今日は、少ないわ。去年は百匹を超えたわ」と案内役の女性。光る



写真1:ゲンジボタル 2019.6.6 木更津市

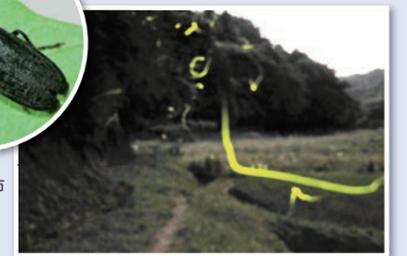


写真2:ゲンジボタルの光 2010.6.17 木更津市

ホタルを捕虫網で捕らえた。胸が上品な桃色で十字形の黒紋があった。ゲンジボタルに間違いなかった。それを確認して、ホタルを逃がしてやった。かつて、「ゲンジボタルは流域の谷津の奥にいる」と友人から教わっていた。用水でカワニナを食べる幼虫も捕らえた。しかし、夜の観察機会がなく、今回、ゲンジボタルの光の舞いをやっと見られて嬉しかった。

「この頃、この付近でも農家の後継者不足で、谷津田の耕作をやめています。それで、ホタルの幼虫が生活する用水の清流とさなぎになる畦が少なくなりました。この田が来年も耕作され、ホタルが見られるといいね」と話しながら、皆、満ち足りた気持ちで帰ってきた。

参考文献 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドリスト 動物編 2019年改訂版 (文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

MEMO

ゲンジボタル  
コウチュウ目ホタル科  
全長オス約15mm、メス約16mm

千葉県指定重要保護生物。日本特産種。清流と森林が接続している場所に多い。幼虫は清流中でカワニナなどの巻貝を食べて育ち、水辺の土中でさなぎになる。5月下旬～6月に出現。ヘイケボタルより少し早く現れる。流域の谷津の奥の田にはたいてい生息しているが、ヘイケボタルと比較して数は多くない。

### しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

高いところからのんびり遠くを眺めていると、今までと違った視点でものを見たり、考えたりすることができるようになります。このコロナ禍の中で、私たちが先のこと客観的に見通せる眼を持ちたいものですが、実際には手探りで毎日あたふた過ごしているような状況です。

さて令和二年度は、子ども達に人気の平田和彦(鳥類学)が房総の山のフィールド・ミュージアムを離れ、昆虫にめっぽう詳しい斉藤明子(昆虫分類学)がメンバーに加わりました。旧人(尾崎煙雄、八木令子)ともどもよろしくお願ひ致します。(八木令子)

編集後記



写真1 産卵中のチャバネアオカメムシ (体長10~12ミリ)

カメムシは植物を餌とする種が多く、中には寄主特異性(注2)が強いものもいるため、種構成は植物の分布や植生に左右されることが分かっています。以前このコラムで、房総半島を含む関東地方の低地が照葉樹林帯のほぼ北限に位置することが扱われていましたが、カメムシについても同様で、房総丘陵は西南日本や、果てはそれより南の国に分布する種の東限・北限である場合が多いです。たとえばスコットヒョウタンナガカメムシ(写真2)は、房総丘陵のあちこちで目にする種ですが、遠く東南アジアから中国、沖縄を経て西日本に広く分布し、房総丘陵は分布のほぼ北限に当たります。一方で、近隣の他県では標高八〇〇メートル以上のブナ帯で出現し、北日本やシベリアなどの北の地域に分布の中心を持つ種が、高くても標高四〇〇メートルほどしかないここ房総丘陵に分布することが知られています。北方系、山地性種が房総丘陵に分布する事例は他の昆虫や植物でも確認されており、これらは最終氷期の遺存分布の結果と考えられています。



写真2 スコットヒョウタンナガカメムシ (体長約6ミリ)



写真3 マルゲンバイ (体長約2ミリ)

皆さんは、「カメムシ」というと、緑や茶色の六角形をした臭い虫というイメージをお持ちの方が多いかも知れませんが(写真1)。しかしながら、千葉県からこれまで四〇〇種以上も記録されています。日本からはおよそ一一〇〇種のカメムシが記録されているので、千葉県には日本産種の三十五パーセントが分布していることとなります。

さて、千葉県のカメムシのファウナ(注1)は、一体どのようにして成立したのでしょうか？

このように、房総丘陵をはじめとした千葉県のカメムシの分布は独特ですが、マルゲンバイのみならず県新記録種の相次ぐ発見や、既に記録がある種でも分布情報が断片的であるなど、ファウナの全体像の把握は不十分です。また、一部

の南方系の種が分布を拡大させつつあったり、人為的に侵入した外来種が相次いで新たに確認されたりと、ファウナは刻一刻と変化し続けています。臭いために嫌われがちなカメムシですが、そのにおいの裏には面白い謎がたくさん詰まっていることに、思いを馳せてみませんか？

コラム 成り立ちを考える



房総丘陵の動植物(17)

カメムシは植物を餌とする種が多く、中には寄主特異性(注2)が強いものもいるため、種構成は植物の分布や植生に左右されることが分かっています。以前このコラムで、房総半島を含む関東地方の低地が照葉樹林帯のほぼ北限に位置することが扱われていましたが、カメムシについても同様で、房総丘陵は西南日本や、果てはそれより南の国に分布する種の東限・北限である場合が多いです。たとえばスコットヒョウタンナガカメムシ(写真2)は、房総丘陵のあちこちで目にする種ですが、遠く東南アジアから中国、沖縄を経て西日本に広く分布し、房総丘陵は分布のほぼ北限に当たります。一方で、近隣の他県では標高八〇〇メートル以上のブナ帯で出現し、北日本やシベリアなどの北の地域に分布の中心を持つ種が、高くても標高四〇〇メートルほどしかないここ房総丘陵に分布することが知られています。北方系、山地性種が房総丘陵に分布する事例は他の昆虫や植物でも確認されており、これらは最終氷期の遺存分布の結果と考えられています。

分布を広げる能力が非常に低く、沖積平野など、縄文海進で水没した後に陸地になったところには分布しないとされています。房総丘陵からはこれまでマルゲンバイの記録がありませんでしたが、昨年になって清澄山の周辺で記録され、千葉県にも分布していることが明らかにになりました。その後、房総丘陵の他の場所からも発見することができたため、現在それらの記録を報告すべく論文を執筆しています。それと同時に、房総丘陵のどの範囲にマルゲンバイがいるのかについても調査を進めており、ゆくゆくはマルゲンバイの分布から房総丘陵の地史をひもとくことができるようになるかも知れません。

注1 ファウナ…特定の地域に生息する動物の種構成のこと。  
注2 寄主特異性…ある生物が特定の植物種や生物種のみを餌とすること。(伴 光哲)

特集

人見神社からの眺望 — 三舟山の成り立ち —

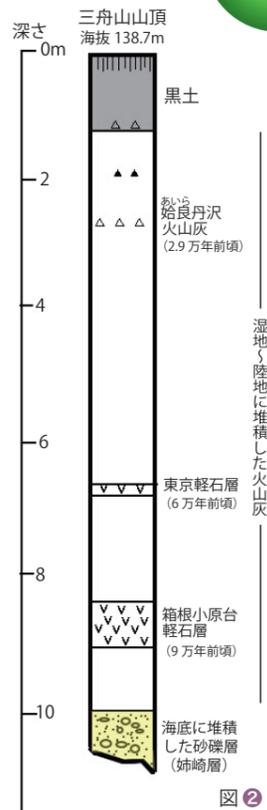


写真 人見神社から見た三舟山



図1 人見神社の位置と小糸川下流域の地形カシミール3D(スーパー地形)の段彩陰影図に、地名や河川を加筆

海成砂礫層(姉崎層)からなることから(中嶋ほか2005)、このあたりにはかつて海が広がっていたと考えられています。一方砂礫層の上には、風化した火山灰層が厚く堆積しています(杉原ほか1978)。三舟山の頂上部で行われたボーリングでは、表層から十メートルほど火山灰層が続き、その下部に、九万年前頃の箱根火山の噴火によって降下した軽石層(箱根小原台軽石層)がはさまれていることが明らかにされました(図2)。したがってこの軽石層が堆積する少し前には、海が干上がって、湿地のような環境になり、その後陸化していったと考えられます。なぜなら細粒の火山灰層は、波が寄せるような場所では流されてしまうからです。陸化した時期は、十万年前頃と考えられます。房総半島は南部ほど隆起傾向にあるので、元の海底は高度を上げ、その上に火山灰が降り積もって現在のようないっぺんになったのです。また三舟山は、火山灰や透水性の高い砂礫層からなるため、雨が降ってもすぐに水がしみ込んでしまいます。鹿野山と同じように、地表に細かい谷がでできない「カデナ」地形(八木2019)です。そのため上総層群の泥からなる丘陵のような水流侵食が進まず、「高い平坦面」が保存されていると考えられます。

図1 人見神社の位置と小糸川下流域の地形カシミール3D(スーパー地形)の段彩陰影図に、地名や河川を加筆

図2 三舟山山頂のボーリングによる地質柱状図(杉原ほか(1978)の図2の一部を基に作成)

人見神社から南東方向を眺めると、正面に船を逆さまにしたような高まりが見えます(写真)。これは標高一三八・七メートルの三舟山で、君津の街のあちこちからも、その特徴的な山の形が見られます。どうしてこのような平らな山ができたのでしょうか。

地名には「山」という文字が入っていますが、三舟山は、房総半島北部に広がる下総台地と同じような、「台地」あるいは「段丘」起源の地形なのです。山頂部には平坦面が残っており、それらは浅い海の底に堆積した

それにしても目の前に見える『山』の頂上が、かつては海の底であったというのには、何やら不思議な感じがします。図1の地図で、三舟山より北西側の低地や北側の下総台地など、今よりずっと広範囲に海(東京湾)が広がっていたというのが、三舟山が陸地になる直前の房総半島のイメージです。もともとそうなるなら、人見神社のある高台も海の中で、のんびり景色など眺めていられる場所ではなかったということになります。(八木令子)

【文献】

中嶋輝允・渡辺真人(2005)「富津地域の地質、地域地質研究報告(五万分の一)地質図幅、産総研地質総合調査センター：11-12。

杉原重夫・吉村光敏・細野衛・森脇広(1978)「房総半島南部の後期更新世テフラ層と海岸段丘について」、第四紀研究16-4：255-262。

八木令子(2019)「鹿野山と九十九谷」、しいむじな66号：2